

青年期における対人関係が同調行動に与える影響

小野 聖華

(田中 史子ゼミ)

問題と目的

現代の日本社会では、いじめ件数が年々増加し問題視されている。文部科学省によると、令和6年度の小・中・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数は769,022件と過去最多と報告されている。また、文部科学省は、いじめを「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む。）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」と定義しており、いじめは被害者の心身の健康に影響を与えるだけでなく、将来的な社会生活にも悪影響を及ぼす。西野（2017）によると、仲間への同調傾性が高いほど、いじめ場面において加害行動に加担しやすい可能性があるとし唆されており、いじめ増加の背景に同調行動が関係していると考えられる。

同調行動とは、「集団意思決定の際に、周囲の意見と同調させるように作用する無形の圧力」（青木ら2004）という同調圧力がかかることによって、「自分とは異なる意見・態度・行動を周囲から求められたとき、迷いながらも周りの意見・態度・行動に合わせてしまうメカニズム」（藤原2006）である。例えば、少数派の意見を持っていた人が多数派に合わせて意見を変えることが挙げられる。ケインら（2021）によると、同調行動に関する一連の研究は、社会心理学者であるAsch（1951）の線判断課題による実験から始まったとされている。Asch（1951）の実験では、参加者8人のうち7人をあらかじめ誤った答えを言うよう指示されたサクラ（実験協力者）として配置し、残り1人を真の実験対象者とした。実験対象者には1本の基準線を提示し、その後3本の線の中から同じ長

さの線を選ぶ課題が与えられた。この課題は表向きには単なる線の長さを判断する実験として設定していたが、実際には実験対象者がサクラと異なる解答で少数派の立場になった時、どのような行動をとるかを観察することが目的であった。その結果、サクラがあえて間違える回において、実験対象者の約3分の1が多数派のサクラに同調して誤答することが明らかとなった。これらの結果から、集団内での孤立や社会的圧力が個人の判断に大きな影響を与えることを示唆している。Markusら（1991）は、日本を含むアジアには、他者との関係性を重視し、協調することを大切にする相互協調的自己観が優勢とされる文化があると述べている。現代においても、“KY”と空気が読めないという意味を持つ言葉が2007年の流行語大賞にノミネートされたように、日本社会では空気を読むことが重視され、周囲との協調を大切にする文化が根強く存在している。このような文化的背景により日本では日常で多くの同調行動がみられる。また、高田（1999）は、中学生から大学生までの青年期において協調性を重んじる傾向があると示唆している。

岡田（1995）の研究では、現代の青年の友人関係の特質として、表面的な楽しさを求める傾向、傷つくことを恐れる傾向、深い関わりを回避する傾向の3つの傾向が見出された。こうした現代の青年の友人関係のあり方に関連して、葛西ら（2010）の研究では、同調行動を行う青年は、他者からどう思われるかを気にすることが明らかになり、このような青年は、自分を偽ってでも他者から認められようとするのが推測され、こうした行動は現代の友人関係が表面的であると指摘される要因の一つであると示唆している。一方、学校内にはスクールカーストというものが存在する。小原（2021）は、「スクールカーストとは、小学校の高学年から中学、高校のクラスにおける、生徒の閉

鎖的なグループ間に見られる、認識された人気に基づく上下関係の階層構造である」と定義している。これにより、上位の「1」軍が権力を持ち、2軍・3軍と下の軍が意見を言えなくなる可能性や、カーストの低い生徒が、周囲の同調圧力でいじめの標的になりやすい可能性がある。齋藤（2000）は、加害者の力の優越やいじめ集団による同調圧力の強さが、傍観者の同調意識の形成に影響すると示唆している。これらの研究では、友人関係とスクールカーストでの地位の対人関係の在り方の違いが同調行動に与える影響についての比較は十分に行われていない。

そこで、本研究では友人関係とスクールカーストでの地位のどちらの対人関係の在り方が同調行動により影響を与えやすいのか明らかにすることを目的とする。この研究を通じて、青年期における、いじめ行動の予防に繋がる可能性がある対策を見つけることができると考えられる。友人関係は表面的な関係であるものの、対等な横の人間関係が築かれているが、スクールカーストは序列に基づく縦の人間関係が築かれているため、スクールカーストの方が友人関係よりも同調圧力が強く働き、同調行動を引き起こしやすいと考えられる。

方法

1. 対象

関西の私立大学に通う男女79名（男性42名女性37名）を対象に質問紙調査を行った。平均年齢は19.87歳（SD=1.31）であった。回答は匿名で行った。

2. 調査内容

本研究では、調査協力者が具体的な状況を想起し回答しやすいよう、架空の場面を文章で提示し、その内容に対する回答を求めるピネット調査を用い、同調行動をどの程度引き起こしやすいかを調査した。ピネット調査とは、「架空の人物や状況を評価対象として設定し、それに対する回答者の評価や判断を測定する方法」（塩谷ら2012）である。

なお、友人関係及びスクールカーストにおける同調行動に関するピネットはオリジナルのピネットを作成して実施した（表1参照）。本調査に先立ち、提示する場面の選定及び回答に要する時間の目安を把握するため、アンケート用紙及びGoogleフォームを用いて予備調査を実施した。また、ピネット提示において、条件の順序順による影響を避けるため、質問紙の半分は「あなたの仲の良い友人4人と一緒にいる状況」、もう半分は「学校で中心的な存在である同級生4人と一緒にいる状況」を先に提示するカウンターバランスを用い、各条件で10場面提示した。

さらに、中立的な回答を避けるため、「思わない」「あまり思わない」「少し思う」「思う」の4件法で行った。

結果

1. 対人関係の違いからみた

同調行動の程度の差異の比較

友人関係を「仲の良い友人条件」、スクールカーストでの地位を「学校での地位条件」とし、2つの対人関係の在り方の違いによる同調行動の程

表1. 質問紙調査で用いた各場面の内容

場面1	映画を観に行く際、周囲は自分の苦手なジャンルを観たいと話している中で、周囲に合わせて一緒に観ようと思うか
場面2	話し合いにおいて、少数派の立場に立った時、自分の意見を変えて周囲に合わせて思うか
場面3	会話中に興味のない話題になった時、話題について調べ、話についていこうと思うか
場面4	行く気のない打ち上げに、周囲に合わせて参加すると思うか
場面5	買うつもりのない商品を、周囲に合わせて買おうと思うか
場面6	周囲が赤信号にも関わらず、道を渡ろうする時、周囲に合わせて一緒に渡ろうと思うか
場面7	食事中、残り1つの好物がある時、周囲の様子を気にして食べることを遠慮すると思うか
場面8	ドラマの話題で、面白いと思っていないにも関わらず、周囲に合わせてそのドラマを面白いと共感すると思うか
場面9	出かける予定があり、周囲が自分の好みではない服装をしている時、周囲に合わせて同じ系統の服装をして出かけようと思うか
場面10	長く続く会話で、離脱したいと感じている時、周囲に合わせて参加し続けようと思うか

青年期における対人関係が同調行動に与える影響

度に差があるのかを検討するため、対応のある t 検定を行った。その結果、有意差が認められず ($t(78)=0.6, p>.05$)、友人関係とスクールカーストという対人関係の在り方の違いによる同調行動の程度に差がみられないことが示された (表2参照)。

次に、男女それぞれにおいて、友人関係とスクールカーストという対人関係の在り方の違いによる同調行動の程度に差があるのかを検討した。男性、女性それぞれで対応のある t 検定を行った結果、有意差が認められず (男性: $t(41)=0.32, p>.05$, 女性: $t(36)=1.18, p>.05$)、男女どちらともに友人関係とスクールカーストという対人関係の在り方の違いによる同調行動の程度に差がみられないことが示された (表2参照)。

2. 場面ごとの対人関係の違いからみた

同調行動の程度の差異の比較

場面ごとに2つの対人関係の在り方の違いによ

る同調行動の程度に差があるのかを検討した。検討するため、対応のある t 検定を行った。その結果、場面3・場面4・場面7・場面9のみ、有意差が認められ (場面3: $t(78)=2.19, p<.05$, 場面4: $t(78)=2.03, p<.05$, 場面7: $t(78)=3.17, p<.05$, 場面9: $t(78)=2.91, p<.05$)、場面3・場面4では友人関係の方がより同調行動に影響を与え、場面7・場面9ではスクールカーストの方がより同調行動に影響を与えやすいことが示された (表3参照)。

次に、場面ごとの男女それぞれにおいて、友人関係とスクールカーストという対人関係の在り方の違いによる同調行動の程度に差があるのかを検討した。男性、女性それぞれで対応のある t 検定を行った結果、男性の場面7・場面9のみ、有意差が認められ (場面7: $t(41)=3.76, p<.05$, 場面9: $t(41)=2.47, p<.05$)、男性の場面7・場面9とともにスクールカーストの方がより同調行動に影響を与えやすいことが示された (表4参照)。

表2. 性別別における大学生の
対人関係による同調行動の程度
(男性: N=42, 女性: N=37)

性別	仲の良い友人条件		学校での地位条件	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
全体	23.7	4.93	23.96	5.72
男性	23.33	4.67	23.14	5.49
女性	24.11	5.24	24.89	5.91

表3. 場面ごとにおける大学生の
対人関係による同調行動の程度
(N=79)

場面	仲の良い友人条件		学校での地位条件	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	2.91	1.12	2.8	1.18
2	3.25	0.98	3.3	0.91
3	2.32*	0.99	2.1*	1.01
4	2.68*	1.12	2.49*	1.11
5	1.86	1.08	1.87	1.07
6	2.03	1.07	2.05	1.04
7	2.44*	1.11	2.78*	1.16
8	2.34	1.04	2.42	0.99
9	1.68*	0.91	1.87*	0.94
10	2.18	1.01	2.27	1.14

注: * $p<.05$

表4. 場面ごとの性別における大学生の
対人関係による同調行動の程度
(男性: N=42, 女性: N=37)

場面	性別	仲の良い友人条件		学校での地位条件	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	男性	3.1	1.1	2.9	1.14
	女性	2.7	1.13	2.68	1.23
2	男性	3.14	1.12	3.21	0.95
	女性	3.38	0.79	3.41	0.86
3	男性	2.17	0.91	1.98	0.92
	女性	2.49	1.07	2.24	1.1
4	男性	2.6	1.08	2.33	1.07
	女性	2.78	1.16	2.68	1.13
5	男性	1.98	1.18	1.79	1.09
	女性	1.73	0.96	1.97	1.04
6	男性	1.98	1.02	1.93	0.95
	女性	2.08	1.14	2.19	1.13
7	男性	2.24*	1.14	2.74*	1.23
	女性	2.68	1.03	2.84	1.09
8	男性	2.29	1.02	2.33	1
	女性	2.41	1.07	2.51	0.99
9	男性	1.6*	0.83	1.76*	0.88
	女性	1.78	1	2	1
10	男性	2.26	1.01	2.17	1.1
	女性	2.08	1.01	2.38	1.19

注: * $p<.05$

考 察

1. 対人関係の在り方の違いと同調行動の関連

本研究では、スクールカーストでの地位の方が友人関係よりも同調行動に影響を与えやすいという仮説を立てた。しかし、結果は場面全体では有意差が認められず、場面ごとの分析を行った結果、場面3・場面4で友人関係の方がスクールカーストでの地位よりも同調行動に影響を与えやすいことが示された。また、場面7・場面9でスクールカーストでの地位の方が友人関係よりも同調行動に影響を与えやすいことが示された。このことから、同調行動を引き起こす要因は対人関係の在り方の違いだけでなく、同調圧力を受ける状況の違いも同調行動に影響を与えると考えられる。

友人関係の方がより同調行動に影響を与えやすい場面は、場面3の興味のない話題に付いていかどうか、場面4の行く気のない打ち上げに行くかどうかを問う場面であった。葛西ら(2010)の研究では、「仲間への同調」と、相手の評価を意識して振る舞い、認められようとする「演技性承認欲求」との間に弱い関係がみられることが示されている。また、榎本(2000)は、親和欲求は青年期を通し友人に対する欲求の中でも最も基本的かつ重要な欲求であることが示され、友人づき合いの基礎となり友人関係を支える要素であることを示唆している。さらに、友人に対する信頼感や安心感だけでなく、不安感も抱くことで、友人への欲求を引き起こすことを示唆している。これらのことから、価値観の合う友人として認められたいという承認欲求や、話に付いていけないことによる友人関係の希薄化への不安、孤立を避けるために行く気のない打ち上げでも少しでも時間を共に過ごし関係を深めたいという親和欲求が働き、同調行動に至りやすかったと考えられる。また、中心的な人物というスクールカーストにおいては、できるだけ関わりたくないという気持ちや、人としては認められたいものの友人関係を築きたいとは思わないといった心理が働き、承認欲求や親和欲求が生じにくかったため、友人関係の方が同調行動により強く影響したと考えられる。

スクールカーストの方がより同調行動に影響を与えやすい場面は、場面7の残り最後の一個の好

物を遠慮するかどうか、場面9の自分の好みではない系統の服装を周りに合わせて着るかどうかを問う場面であった。齋藤(2000)は、加害者の力が優越であるほど、傍観者の同調意識の形成に影響を及ぼすことを示唆している。また、久保田(2018)は、グループ間の影響力を左右する要因の一つとして中心性を示唆している。さらに、ケインら(2021)は、同調行動を発生する要因の一つとして、「不利益を回避したいという動機」に基づいて受けたみんなから嫌われたくないという「規範的影響」があると示唆している。これらのことから、周りの許可なしに無断で残り一個の好物を食べる行動は、自己中心的な人物だと否定的な評価がされ、それが中心的な人物から集団内に広まり集団から嫌われることを避けようとする心理が働き、同調行動に至りやすかったと考えられる。また、友人関係では、互いの好みや行動傾向をある程度理解しているため、無断で好物を食べても好きな食べ物だから食べたのだと理解してくれるから大丈夫であろうと人間関係が損なわれにくいという安心感が働いたため、スクールカーストの方が同調行動に至りやすかったと考えられる。なお、自分の好みではない系統の服装を周りに合わせて着るかどうかを問う場面では有意差が認められたものの、同調を示す値は、いずれの対人関係においても同調しない傾向が示された。この結果から、現代の日本社会では、多様性が尊重されているため、周りと系統が異なる服を着ているだけで逸脱した人物であると否定的に評価されにくく、同調行動が起きにくかったと考えられる。また、本研究の調査協力者は大学生であり、私服で学校生活を送っているため、友人関係になる以前から互いの服装の系統を認識している。そのため、特に友人関係において同調を示す値が低く、有意差が認められたものの、同調行動は起きにくかったと考えられる。

2. 男女それぞれにおける

対人関係の在り方の違いと同調行動の関連

男女それぞれにおいて、友人関係とスクールカーストという対人関係のあり方の違いが同調行動に影響を及ぼすかを検討した。その結果、男性では場面7・場面9においてのみ有意差が認めら

青年期における対人関係が同調行動に与える影響

れ、場面7・場面9のどちらともでスクールカーストの方が同調行動に影響を与えやすいことが示された。田村（2017）では、男性が自己犠牲・追従型の同調行動をとる要因として、賞賛欲求、回避欲求、迎合欲求が関連していることが示されている。このことから、場面7において、あまり関わりたくない相手であっても関わるからには嫌われたくない、「空気を読める人間」として高く評価されたいという欲求が働いた可能性が考えられる。その結果、中心的な人物であるスクールカースト上位の者と共に食事をとる状況では、食べたいという思いがありながらも、周囲が好物に手を伸ばさない様子を見て、自身も食べることを控えるといった同調行動に至りやすかったと示唆される。また、和田（1996）は、男性が友人関係で期待するものとして、「趣味や好みが一致している」という共行動や類似であることを示唆している。このことから、場面9の自分の好みではない系統の服装を周りに合わせて着るかどうかという状況において同調する行為は、男性の友人関係において期待するものとは逆方向にあたる行動であるため、より友人関係において同調行動が起きにくかったと考えられる。

一方、女性においては、友人関係およびスクールカーストのいずれの場面においても、同調行動の程度に有意差は認められなかった。田村（2017）は、女性の同調行動には回避欲求および迎合欲求が関与していることが示されている。また、女性は深く親密な関係を望む一方で、関わる以上は相手から好意的に評価されたいという動機を持つことを示唆している。このことから、本場面においては、友人関係では親密な関係を維持したいという欲求が働き、スクールカーストにおいては相手に気に入られ、否定的な評価を避けたいという欲求が働いた可能性が示唆される。その結果、いずれの対人関係においても同調行動が起きやすく、両条件間で差がみられなかったと考えられる。

3. 同調・非同調が曖昧であった場面

対人関係の在り方の違いによる同調行動の程度の差に有意差が認められず、かつ両条件とも同調するかしないかが曖昧であった場面は、場面1の苦手なジャンルの映画を観るかどうか、場面6の

赤信号を一緒に渡るかどうか、場面8の面白いと思っていないドラマを面白いと共感するかどうか、場面10の長く続く会話から先に離脱するかどうかであった。坂本（1999）は、内心に集団意見と異なるはっきりとした自己意見を持つ高葛藤な課題よりも自己意見を持たない低葛藤な課題の方が同調しやすいと示している。このことから、場面1では、苦手なジャンルの映画を観て不快な思いをしたくないという内心と、観ることを拒否することで好みが合わない人だと評価されたり、周囲に気を遣わせたりすることを避けたいという同調動機との間で葛藤が生じた可能性が考えられる。同様に、場面6では、赤信号では渡るべきではないという内心と、一人だけ立ち止まることで融通の利かない人だと評価されることを避けたいという同調動機が、場面8では、面白くないものを面白いと認めたくないという内心と、面白いと言わないことで価値観の合わない人だと評価されることを避けたいという同調動機が、場面10では、会話から早く離脱したいという内心と、先に帰ることで相手に「楽しくなかった」と誤解されることを避けたいという同調動機がそれぞれ働き、葛藤が生じやすかったと示唆される。

また、対人関係の在り方の違いによる同調行動の程度の差に有意差が認められたものの、両条件とも同調するかしないかが曖昧であった場面は、場面3・場面4・場面7であった。これらの場面では、いずれの条件においても同調動機と非同調動機の間で葛藤が生じやすい状況であった一方、仲の良い友人の集団と、学校内での地位が上位にある人達の集団という対人関係の構成の違いが、同調行動の程度に影響を与えたと示唆される。

4. 同調・非同調傾向のある場面

場面2は、話し合いにおいて、自分の意見を变えて周りに合わせるかどうかを問う場面であり、この場面では、同調行動を示す値が両条件とも他の場面よりも高く、同調する傾向がみられた。ケインら（2021）は、同調行動を選択する際、規範的・情報的影響では自己を起点とするのに対し、第三の動機では他者を起点としている点が異なると示唆している。このことから、この場面においては、周囲と反対の意見を述べることにより逸脱

者として認識されることへの恐怖といった自己を起点とした動機だけでなく、意見がまとまるまでに時間を要し、その結果として全体に迷惑がかかることを避けたいという他者を起点とした動機も働いた可能性が示唆される。そのため、両条件において同調行動が起きやすい場面であったと考えられる。

一方で、場面5は、買うつもりのない商品を周りに合わせて買うかどうか、場面9は、前述の通り、自分の好みではない系統の服装を周りに合わせて着るかどうかを問う場面であり、同調行動を示す値が両条件とも他の場面よりも低く、同調しない傾向がみられた。同調行動が起きにくい要因として、場面5では「買うつもりない商品」と抽象的な表現であり、連想する商品が調査協力者によって異なった可能性が考えられる。また、場面9では前述の通り、現代の日本社会では多様性が尊重されているため、周りと系統が異なる服を着ているだけで逸脱した人物であると否定的に評価されにくく、周りと合わせなくても問題ないと調査協力者が同調しない判断をしやすい状況であったと考えられる。

今後の課題

本研究では、複数の同調圧力を受ける場面を用いて、対人関係の在り方の違いが同調行動に影響を与えるかについて検討したが、いくつかの課題が残された。

まず、本研究で用いた質問内容はオリジナルのビネットであり、予備調査を行ったものの、同調行動が起きにくい場面が含まれていた可能性がある。そのため、今後は予備調査においてより多くの対象者の協力を得たうえで場面選定を行い、同調行動がより起きやすい場면을提示する必要があると考えられる。

また、本研究では個人特性の要素を取り入れていなかったため、同調行動に影響を及ぼす要因について十分に検討することができなかった。性格特性などの個人差の要素を取り入れることで、より多角的な研究が行える可能性がある。そのため、今後は性格特性を含めた個人差の要素を取り入れた検討が求められる。

さらに、本研究の調査協力者は大学生のみであった。榎本（2000）は、友人関係において大学生では互いに認め合うことを望む「相互尊重欲求」が最も高いことを示しており、和田（1996）は、中学生よりも高校生、もしくは大学生の方が、友人関係により内面的なものを求める傾向があることを示唆している。これらのことから、本研究の対象である大学生は、他者との関係において相互理解や尊重を重視する傾向が強く、その結果として同調行動があまりみられなかった場面が存在した可能性が考えられる。今後は、中学生・高校生を対象に含めることで、年齢による対人関係の在り方の違いが同調行動の程度に及ぼす影響を、より明らかにできる可能性がある。

加えて、質問紙における各条件について、連想された友人との関係性の深さや、中心的な人物として連想された人物のタイプが個人によって異なっていた可能性があり、これらが結果に影響を与えたことも考えられる。そのため、今後はより具体的な人物像を提示するなど、連想される対人関係の条件を明確にする必要がある。

また、質問紙に回答する際に、調査協力者同士の距離が近かったことにより周囲の存在を意識した回答がなされたり、連想する対人関係がその場にいる人物から想起された可能性も考えられる。今後調査を行うにあたっては、調査協力者同士の距離や回答環境に十分配慮し、回答に影響を及ぼさないよう工夫することが求められる。

引用・参考文献

- 青木俊明・星光平・佐藤崇（2004）. 他者情報提示型の同調圧力の作用下における利害関係者の賛否態度の形成 建設マネジメント研究論文集, 11, pp.27-34.
- Asch, S. E. (1951). Effects of group pressure upon the modification and distortion of judgments. In H.Gentzkow (Ed.), *Groups, leadership and men: research in human relations*, pp.177-190. Carnegie Press, Pittsburgh, PA.
- 榎本淳子（2000）. 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究,

青年期における対人関係が同調行動に与える影響

- 48 (4), pp.444-453
- 藤原正光 (2006). 同調行動志向尺度・個人行動志向尺度作成の試み(1) —大学生による小5時代の回想から— 文教大学教育学部紀要, 40, pp.1-9.
- ケイン聡一・小池真由・中島健一郎 (2021). 同調行動研究のこれまでとこれから—動機に着目する必要性— 広島大学心理学研究, 20, pp.121-132
- 葛西真記子・松本麻里 (2010). 青年期の友人関係における同調行動—同調行動尺度の作成— 鳴門教育大学研究紀要, 25, pp.189-203
- 小原一馬 (2021). スクールカーストはなぜ生まれ、それは「悪い」ものになってしまうのか—スクールカースト生成の歴史的要因と上位者の攻撃性が高まる要因の考察— 宇都宮大学共同教育部研究紀要第1部, 71, pp.149-174
- 久保田真功 (2018). クラス内ステータスの構造とその発生メカニズムの検討—中学生を対象とした質問紙調査をもとに— 教職教育研究: 教職教育研究センター紀要, 23, pp.43-54
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the Self: Implications for Cognition, Emotion, and Motivation. *Psychological Review*, 98 (2), pp.224-253.
- 文部科学省 (2019). いじめ定義の変遷 文部科学省 <https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/06/26/1400030_003.pdf> (2025年11月10日)
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2025). 令和6年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について 文部科学省 <https://www.mext.go.jp/content/20251029-mxt_jidou02-100002753_1_4.pdf> (2025年11月10日)
- 西野泰代 (2017). 仲間への同調傾性といじめ経験との関連について 広島修大論集, 57 (2), pp.33-45
- 岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43 (4), pp.354-363
- 齋藤知範 (2000). 第5章 傍観者の意識構造といじめの集団構造 学校臨床研究, 1 (1), pp.38-48.
- 坂本剛 (1999). 同調行動が適応に及ぼす影響—社会的適応と内的適応の視点を中心として— (平成10年度教育心理学専攻修士学位論文概要) 名古屋大学教育学部紀要. 心理学, 46, pp.307-308
- 塩谷芳也・金澤悠介・浜田宏 (2012). ビネット調査による階層帰属メカニズムの検討 理論と方法, 27 (2), pp.243-258
- 高田利武 (1999). 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程—比較文化的・横断的資料による実証的検討— 教育心理学研究, 47 (4), pp.480-489.
- 田村茉奈 (2017). 青年期の両親への信頼感・性別が対人欲求及び同調行動に与える影響について—大学生を対象に— 臨床心理学研究, 15, pp.53-78
- 自由国民社 (2007). 「現代用語の基礎知識」選 ユーキャン新語・流行語大賞 <<https://www.jiyu.co.jp/singo/index.php?eid=00024>> (2025年11月10日)
- 和田実 (1996). 同性への友人期待と年齢・性・性役割同一性との関連 心理学研究, 67 (3), pp.232-237